

論文：韓日看護学生の災害とその教育に対する意識調査—Cross-sectional
Study

著者：李 秀訂，西川 まり子准教授

所属：広島国際大学看護学部看護学科

目 次

| | | |
|-----|-----------------------------------|----|
| I | はじめに | 1 |
| II | 研究方法 | 1 |
| | 1. 調査対象及び調査期間 | 1 |
| | 2. 調査方法および調査内容 | 2 |
| | 3. 分析方法 | 2 |
| III | 結果 | 2 |
| | 1. 地震の経験と恐怖感の有無 | 2 |
| | 2. 地震発生時の対処の比較 | 2 |
| | 3. 災害ボランティアに関する意識度 | 3 |
| | 4. 災害看護の教育 | 4 |
| | 5. 自由記述の Text Mining Studio による分析 | 4 |
| IV | 考察 | 6 |
| | 1. 地震の経験と恐怖感の有無 | 6 |
| | 2. 地震発生時の対処の比較 | 7 |
| | 3. 災害ボランティアに関する意識度 | 7 |
| | 4. 災害看護の教育 | 8 |
| | 5. 自由記述の Text Mining Studio による分析 | 8 |
| V | 結論 | 9 |
| VI | 引用文献 | 10 |

I はじめに

2011年3月11日、日本観測史上最大の東北地方太平洋沖地震が起き、地震及び津波等で死亡15,790人、行方不明4,613人、重軽傷5,215人で計25,618人の人的被害を受けた(総務省統計局, 2011年8月25日)。多くの人々が家族や家を失い、震災から半年が経った今も被災地の復興には数多くの人的・物的資源と時間が必要な状態である。日本と比較して筆者が生まれ育った韓国では地震が起きることはまれで、筆者は韓国で地震を一度も経験したことがない。そのため、日本では看護学生に災害教育を教えているが、韓国の学生は理解できない可能性が高い。さらに、韓国では災害看護に関しての論文は希少であり、韓国の看護学校では災害看護の教育を行わないということに気付いた。日本の看護学校では、教育に取り組まれているが、なぜ韓国では災害看護の教育をしていないのかの疑問と、教育を行っていないことから、日本に比べて災害発生時の対応力に弱いと考えた。実際に韓国の消防防災廳(National Emergency Management Agency)で2010年に行ったシミュレーションによると、韓国首都ソウルの南西地域に震度7.0の地震が起きると約67万人の死傷者が発生し、47万人の被害者が発生するという予測がされたこともある。例を挙げると、日本は地震が多い国であるため、地震発生に備えて建物が設計されており、子供の時から地震が起きた際の退避の方法を教育されている。

筆者は、自然災害を避けることはできないが、教育や援助救護、2次災害の予防に注意すればたくさん命を救えるのではないかと考えた。それには災害に備えて数多くの人的資源が必要であり、被害者の心身のケアを行うことも重要である。今までは、災害看護の教育について看護学生自信の意見を調査した研究は希少である。そこで本研究の目的は、日韓の看護学生に災害看護に関する意識や地震発生時にとる行動の予想を調査し、背景の異なる日韓看護学生の災害看護に対する考え方をすること。災害に備えての看護の必要性を明らかにすることにより、韓国で災害看護の教育が重視され、今後大規模の災害が起きた際の対策の方針に役立てるようにすることである。本研究は看護学生の意識を調査し、災害看護教育の必要性を明らかにするために3つの仮説を立てた。まず一つ目は、災害看護の教育を受けていない韓国の看護学生と教育を受ける日本の看護学生は、災害発生時の対処方法や災害に対しての意識に差があるということである。また二つ目としては、災害看護の教育を受けていない韓国の看護学生は、日本の看護学生に比べて災害ボランティアに参加する意欲が低いということである。最後に、韓国でも洪水や台風などの災害が多いことから、韓国の看護学生も災害看護教育を重要であると意識しているということである。研究対象は日本のH大学の看護学部1~3年、韓国のW大学看護学部1~3年の看護学生で、分析に選択式質問はMicrosoft Excel 2010を、自由記述はText Mining Studio 4.0.1を使用した。

II 研究方法

1. 調査対象及び調査期間

日本H大学看護学部看護学科1~3年生{360名、男性35人(9%);女性325人(91%)}, 韓国W大学看護学部看護学科1~3年生{300名、男性25人(8%);女性275人(92%)}, 計660名に質問紙を配布し、回収率は82.1%(韓国99%, 日本77%)で、有効回答率は86.5%(韓国97%, 日本76%)であった。調査期間は2011年6月16日~2011年8月5日、研究期間は2011年4月1日~10月21日。対象の年齢は韓国が18歳~37歳(平均20.7歳)で日本が18歳~36歳(平均19.8歳)であった。

2. 調査方法および調査内容

調査は自記式質問紙調査票で行い、講義後に質問紙を配布した。倫理面での配慮としてアンケートは任意・無記名・回収ボックスへ提出により個人が特定されないこと、成績には何ら関与しないこと、本研究にのみ使うことを説明し、回答をもって承諾を得られたものとした。質問紙に関しては、適切なものが見当たらなかった為、震災や災害看護に関する文献レビューや政府機関からの情報等を参考とし本研究用に作成した。調査内容は大きく5つの内容とし、地震の経験・地震に対するイメージ、地震発生時の対処方法で災害に関しての知識度、災害ボランティア・災害看護の存在の認知度、災害看護教育の必要度、災害看護に関する自由記述である。これらの調査の結果により、日韓の看護学生の考え方や、災害または災害看護についての重要度を比較することによって、両国の違いを分析、考察した。

3. 分析方法

選択式質問は、Microsoft Excel 10 で記述統計した。また、自由記述は Text Mining Studio 4.0.1 を使用し、単語の出現頻度と、ことばネットワークで単語の関連性を分析した。

Ⅲ 結果

1. 地震の経験と恐怖感の有無

表1に示すように、地震体験の質問に韓国の学生は約27%が体験したことがあり、68%がないと答えた反面、日本の学生は97%が地震を経験したことがあると答えた。詳しく見ると、地震の経験がある韓国の学生は全員、地震に対して「少し怖い」と答え、地震の経験がない学生のうち6人(3%)が「とても怖い」、残りの191人(97%)が「少し怖い」と答えた。また日本は、地震の経験がある学生のうち148人(56%)が「とても怖い」、97人(37%)が「少し怖い」という結果が得られた。

表1. 地震の経験と対処方法

| 項目 | 韓国 n | n=289 (%) | 日本 n | n=271 (%) |
|---------------------------|---------|--------------|---------|--------------|
| 地震の経験 | | | | |
| ある | 77 | (27) | 263 | (97) |
| ない | 197 | (68) | 6 | (2) |
| 分からない(覚えていない) | 15 | (5) | 2 | (1) |
| 地震に対する恐怖度 | | | | |
| とても怖い | 6 | (2) | 154 | (57) |
| 少し怖い | 283 | (98) | 99 | (37) |
| あまり怖くない | 0 | (0) | 11 | (4) |
| 何とも思わない | 0 | (0) | 7 | (3) |
| 学校で地震が起きた場合 | | | | |
| すぐに机の下に隠れる | 211 | (73) | 107 | (39) |
| すぐに外へ逃げる | 44 | (15) | 5 | (2) |
| 教室内の人たちと集まる | 14 | (5) | 20 | (7) |
| そのまま揺れが止まるまで待つ | 13 | (5) | 138 | (51) |
| その他 | 7 | (2) | 1 | (1) |
| 家の中で地震が起きた場合 | | | | |
| 机やテーブルの下に隠れる | 208 | (72) | 103 | (38) |
| すぐに外へ逃げる | 43 | (15) | 14 | (5) |
| そのまま揺れが止まるまで待つ | 21 | (7) | 142 | (52) |
| その他 | 9 | (3) | 9 | (3) |
| トイレに入る | 8 | (3) | 3 | (1) |
| 地震が起きた際に一番恐怖に感じること | | | | |
| 家やビルなどの建物が倒れること | 162 | (56) | 111 | (41) |
| ボイラーやガス等の管のズレによる火災 | 63 | (22) | 27 | (10) |
| 津波 | 30 | (10) | 25 | (9) |
| 周りの物が倒れること | 22 | (8) | 85 | (31) |
| 停電や断水 | 7 | (2) | 17 | (6) |
| その他 | 5 | (2) | 6 | (2) |

2. 地震発生時の対処の比較

表1に示すように、学校や自宅で地震が起きた際に、両国の学生はどのような行動をとるかを質問した。韓国の学生は学校や自宅で地震が起きたら「机やテーブルの下に隠れる」という答えを選んだ学生が70%以上で、「すぐに外へ逃げる」という答えは2位であった。その反面日本の学生は、「そのまま揺れが止まるまで待つ」という人が半数以上であり、「すぐに机の下に隠れる」という人が約40%程であった。また、地震

が起きた時に一番恐怖を感じるのとは何かという質問に対し、韓国の学生は家やビル等の建物が倒れること(56%)、ボイラーやガスなどの管のズレによる爆発(22%)の順位だった。日本の学生も1位は建物の崩壊(41%)だが、その次は周りの物が倒れること(31%)であった。そして、両国の看護学生の約10%は津波に対して恐怖感を感じていることも明らかになった。

3. 災害ボランティアに関する意識度(表2)

1) 災害ボランティアに関する意識度

両国の看護学生に災害看護について知っているかを質問すると、「よく知っている」と答えたのは両国の学生の中でわずか5%もいなかった。「少しは知っている」と答えた学生は韓国31%と日本47%で日本の方が少々多いが、半数もないことが分かった。「あまり知らない」と答えた学生は韓国54%、日本40%であり、「全く知らない」と答えたのは韓国12%、日本が7%であった。

2) 災害ボランティアの参加

両国の看護学生が災害発生時に看護やボランティアをする意欲があるか調査するため、両国の看護学生に看護学

生のうちに災害ボランティアに参加する意欲があるか聞いた。韓国の学生は、学生時代でも「もちろんできる」と答えた人が65%で、「自分に利益があればできる」と答えた人が17%であった。日本の学生は「もちろんできる」と答えた人が55%で、韓国の学生に比べて10%程少なかった。「自分に利益があればできる」という項目でも約4%少なかった。「あまり行きたくない」と答えた韓国学生は17%、日本学生は28%で、「絶対に行かない」と答えた人は1韓国が0%、日本は1%と、韓国の学生の方が災害ボランティアの参加に対しての意欲が高かった。しかし、看護師になってからの参加では、「もちろんできる」と答えた学生が韓国は72%と約8%増加、日本は70%と約15%増加しているが、両国間の差は殆どなかった。「あまり行きたくない」と答えは、韓国が12%で約5%減少、日本が16%で約13%減少した。

3) 災害ボランティアでできること

学生本人が災害ボランティアに参加することになった場合どのような事ができるのかを聞いたところ、韓国の学生は1位が「看護知識を生かしたること」(62%)、2位が「掃除や食事配膳」(17%)であった。そして3位は「相談を聞く」(11%)であった。その反面、日本は「掃除や食事配膳」(50%)と約半分を示し、1位であった。2位は「相談を聞く」(22%)で、3位は「がれきの片づけなどの力仕事」(16%)であった。韓国の学生の1位である「看護知識を生かしたこと」を選んだ日本の学生は8%であり、「その他」の項目を除くと最下位であることと、日本の学生の約半数を示した「掃除や食事配膳」は韓国の

表2. 災害ボランティアに関しての意識度

| 項目 | 韓国 n=289 | | 日本 n=271 | |
|-------------------------|----------|------|----------|------|
| | n | (%) | n | (%) |
| 災害ボランティアに関する知識度 | | | | |
| よく知っている | 9 | (3) | 12 | (4) |
| 少しは知っている | 89 | (31) | 128 | (47) |
| あまり知らない | 156 | (54) | 111 | (40) |
| 全く知らない | 35 | (12) | 20 | (7) |
| 学生時代の災害ボランティアの参加 | | | | |
| もちろんできる | 187 | (65) | 149 | (55) |
| 自分に利益があればできる | 50 | (17) | 36 | (13) |
| あまり行きたくない | 49 | (17) | 76 | (28) |
| 絶対に行かない | 3 | (1) | 8 | (3) |
| 未記入 | 0 | (0) | 2 | (1) |
| 看護師での災害ボランティアの参加 | | | | |
| もちろんできる | 209 | (72) | 190 | (70) |
| 自分に利益があればできる | 33 | (11) | 32 | (12) |
| あまり行きたくない | 34 | (12) | 42 | (15) |
| 絶対に行かない | 3 | (1) | 6 | (2) |
| 未記入 | 7 | (2) | 1 | (1) |
| 災害ボランティアでできること | | | | |
| 看護知識を生かしたること | 178 | (62) | 22 | (8) |
| 掃除や食事配膳 | 55 | (19) | 136 | (50) |
| 相談を聞く | 32 | (11) | 60 | (22) |
| がれきの片づけなどの力仕事 | 20 | (7) | 43 | (16) |
| その他 | 4 | (1) | 10 | (4) |

学生では約 2 割であることで、両国の看護学生の考え方の違いが明らかであった。

4. 災害看護の教育について

両国の看護学生が災害看護の重要度をパーセンテージで表したものを比較すると、100%のうちの平均点が韓国は 67.2%，日本は 73%であり日本の方が約 5.8%高かった。

続いて、日韓の看護学生に災害看護についてどう思うか聞いたところ、「必ず必要だ」の項目に韓国が 24.0%，日本は 62.0%であった。「ある程度必要である」と答えた韓国学生は 68%，日本学生は 38%で、日本はよく地震が起きる国であり、東日本大震災のことも覚えている為、日本の学生のほうが災害看護の必要性が高いという結果が出た。また、災害看護に関しての興味は「とても興味がある」を選んだ韓国の学生が 10.4%，日本の学生が 26.6%であり、その次の「やや興味がある」を選んだ学生は韓国 62.3%，日本 59.4%と、両国の学生が 7 割以上災害看護に興味を示した。

表3. 災害看護について

| 項目 | 韓国 n=289 | | 日本 n=271 | |
|----------------------|----------|------|----------|------|
| | n | (%) | n | (%) |
| 災害看護に対してどう思うか | | | | |
| 必ず必要だと思う | 69 | (24) | 167 | (62) |
| ある程度必要だと思う | 198 | (69) | 103 | (38) |
| あまり必要だと思わない | 21 | (7) | 1 | (1) |
| 全く必要ないと思う | 0 | (0) | 0 | (0) |
| 未記入 | 1 | (1) | 0 | (0) |
| 災害看護に興味があるか | | | | |
| とても興味がある | 30 | (10) | 72 | (27) |
| やや興味がある | 180 | (62) | 161 | (59) |
| あまり興味がない | 76 | (26) | 33 | (12) |
| 全く興味がない | 1 | (1) | 4 | (2) |
| 未記入 | 2 | (1) | 1 | (1) |

5. 自由記述の Text Mining Studio による分析

アンケートの自由記述では回答者が自分の言葉で表現した文章に含まれている言葉をより細かく分析した。Text Mining Studio は文章を単語まで分解したものを対象とし、マイニングとして大量のデータから知識を発掘するプロセスである。筆者は、基本情報、頻度分析、ことばネットワークで自由記述のデータを分析した。分析には数理システムのテキスト(Text Mining Studio, 2011)と、金城ら(看護学生の禁煙を阻害する要因, 2010)の論文を参考とし分析を行った。

テキストの基本情報に関して、韓国は文章量が多く、総文数 176 文、平均文長 24.3、延べ単語数 2493、単語種別数 451 であった。また、日本の方は総文数 63 文、平均文長 18.5、延べ単語数 688、単語種別数 227 であった。

災害看護について思い浮かぶことについての質問には、韓国は 151 人、日本は 56 人の回答があった。単語頻度解析をしたところ、図 1 と図 2 に示すように両国の学生の自由記述から「災害」、「看護」、「する」、「無い」という言葉が上位を占めている。述べている単語を比較すると、韓国は「受ける」、「被害」、「ボランティア」、「行う」など、学生自身が持っている災害看護のイメージを簡単に示している。例を挙げると、「被災地に行って災害を受けた人に行う看護」である。日本学生の自由記述で単語を見ると、「ケア」、「大事」、「大変」など災害看護を行う上でどんなことが必要とされているかなどがより具体的に書いてある。「地域の連携が大事である」、「健康チェックによる被災者の安全の確保」などがその例文である。

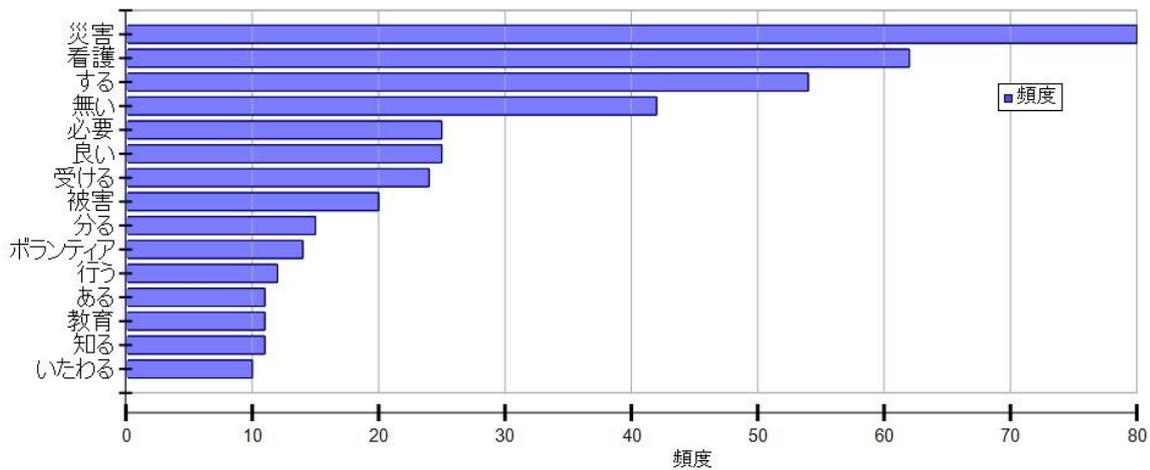


図 1. 単語頻度解析 韓国人看護学生が思い浮かぶこと

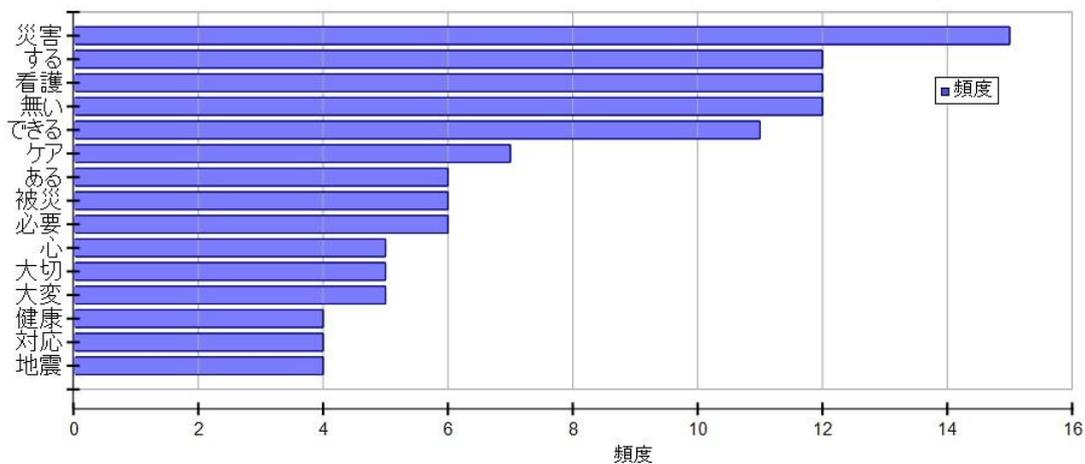


図 2. 単語頻度解析 日本人看護学生が思い浮かぶこと

ことばネットワークで解析したところ、図3の韓国を見ると「看護」、「知識」、「知る」、「いたわる」で、一番大きいグループAに1位の「災害」との関連単語が検出された。災害が発生した地域で行う看護や、被災者をいたわることなど、災害看護に関する総合的な概念が見られる。また被災地で学生たちのできることも述べられており、「できる」という単語も見られる。図3の日本は、グループAでは「災害」にもっとも関連している単語で、「増える」、「地震」、「自然」、「起きる」などが述べられ、これからは自然災害が増えていくことに対する不安やそれに対する対策の重要度が示されている。

そして韓国のグループBでは、「心身」、「サポート」、「治療」、「参加」といった、被災者たちへの看護の内容が書かれていた。日本のグループBでは「技術」、「できる」、「連携」、「何」と、災害に備える技術を身につくことや地震発生時の連携の大切さ、自分に何ができるのか考えることの大切さなどが反映されている。韓国と同様に、被災者への看護として心身のサポートに関する「心」、「身体」、「ケア」という単語も関連していることが分かる。さらにグループDには、「被災」、「精神」、「面」、「行く」などの単語が関連しており、被災地に行き、被災者の精神面のケアの重要性が述べられている。

韓国のグループCでは「分かる」、「無い」、「良い」など、災害看護に対して「分からない」、「分かる

韓国での教育のことが考えられる。筆者は子供時代に、韓国のテレビで地震が起きた際には机の下に入ることが一番いいということが何度も放送されていたことを覚えている。これは筆者に限らず、殆どの韓国人が同じ経験をしたであろう。学校でも地震が起きたら机の下に入らないといけないと学んだので、その印象が強く残っている。しかし日本学生は、「そのまま揺れが止まるまで待つ」という意見が5割以上あった。日本は震度の弱い地震が頻繁に起きるので、身の危険を感じない以上は慌てずまず状況の把握をする学生が多いからだという推測ができた。さらに、「その他」の欄には、「ドアや玄関を開けて逃げ口を確保してから机の下に入る」という意見も複数あったので、ただ机の下に入るだけではなく、避難の準備を徹底的に行うということで日本の学生がより具体的に避難の対処を知っていると考える。それに反して、韓国の学生は「家族に電話をする」、「先生の指示があるまで何も行動しない」という意見があり、地震時に受動的に行動してしまう可能性があるため、地震を含めた災害の発生時の対処が取れず、冷静的な判断ができないと思うので、災害発生時に災害の対処方法教育が必要であると言える。

また、地震発生時に一番怖いこととして両国の学生は「家や建物が倒れること」を選んだ。韓国の学生はその次に「ボイラー・ガスなどの管のズレによる爆発(火災)」を選んだ。韓国の建築物安全専門家のいらによると(韓国建築構造技術, 2011年3月15日)、ほとんどの建物は地震に無防備な状態であることと、韓国全体の建築物680万棟の中、わずか2.3%にあたる16万棟が耐震設計で適用されており、特に全体の0.6%の4万棟のみ、建築構造安全専門家により作られているということであった。韓国は高層のマンションが多く、組積造か鉄筋コンクリートで作られている為、弱い震度の地震でも崩壊の危険性が非常に高いと考えられる。その上に、オンドルという韓国伝統の床暖房生活の為、地震が起きると管がずれて火事になる可能性も高い。韓国の学生はそれを認識していることで、建物の崩壊や火事に対する心配が大きいと言える。姜教授によると(2007年)、2029年までに震度7以上の地震が起こる確率は60%程度であり、日本の大地震と韓国の地震は1~2年程度の期間をはさんで連動しているということであった。韓国では様々なリスクがあると判断するため、なるべく早く地震に対処できるように備える必要がある。

3. 災害ボランティアに関する意識度

1) 災害ボランティアに関する意識度

日本の学生は東日本大震災のことでメディアを通して「災害ボランティア」という言葉を聞いたことがあるか、さらにはその内容をイメージできると予測していた。しかし、災害ボランティアに対して知っていると答えた日本学生は5割で、残りの5割は知らないと答えた。韓国の学生は約3割が知っていると答え、7割は知らないと答えた。このことで、震災が起きてからまだ長くの時間が経っていないにも関わらず、看護学生の約半数は災害看護や災害ボランティアを知る機会が少ないか、災害看護に対する興味が少ない可能性が高く、災害の教育を行うことで看護学生に災害看護のことを意識させることと、興味を持たせることができると考える。

2) 災害ボランティアの参加

両国の学生の半数以上が看護学生であっても災害ボランティアに行くことに対し「もちろんできる」と答えた。また、看護師になってからは、両国の学生の7割以上が「もちろんできる」と答え、災害ボランティアに積極的であった。しかし、どっちにしても「あまり行きたくない」と答えた学生は1~2割程で、韓国の学生より日本の学生が多かった。韓国人は災害が起きた際にはテレビやインターネット

でボランティアをする場面を放送し、ボランティアに呼びかけることが多い。また、学校や親が教育としてボランティアに連れて行くこともあるため、ボランティアに行くことに対してポジティブに考えている人が多いと思われる。日本でももちろん様々なボランティア団体があり、ボランティアに対してポジティブであると思われるが、今回の大震災で災害看護・ボランティアに対して恐怖心を覚えた学生もいると思われる。このことから、両国の看護学生に災害看護・ボランティアについて十分な教育を行い、災害発生時に活動できる人材を確保しなければならないと考える。

3) 災害ボランティアでできること

災害ボランティアに行くことになったと仮定し、看護学生としてどのような事ができるかという質問に対して、韓国は「看護知識を生かしたこと」という項目に6割以上の学生が答えた反面、日本は「掃除や食事配膳」という項目に5割以上の学生が答えた。この質問に関しては、日韓の看護学生が対症的な答えをしており、韓国の学生は看護学生であるため、看護知識を活用しようとしているが、日本の学生は掃除・食事配膳・力仕事などの答えが多かった。しかし、2割の学生は「相談を聞く」という項目を選び、基礎看護という限られた制限で、今まで学んできたコミュニケーション能力を生かすことはできるという判断であると予測した。実際に看護師でないバイタルサイン程度のことしかできないことを考慮していると考えられる。

4. 災害看護の教育

今回の調査は災害看護の教育を受けたことのない学生が対象となったが、災害看護が自分の中でどのくらい重要であるかをパーセンテージで聞いたところ、韓国の平均は67.2%、日本の平均は73%であり、日本の方が約6%高かった。しかし両国の学生とも災害看護に対しての重要度を高く評価しており、災害看護の教育の重要性も高いということが明らかになった。また、表3に示すように、韓国は災害看護に対して9割が必ず必要とある程度必要と答えた反面、日本の看護学生はほとんど全員が必ず必要とある程度必要と答え、両国の看護学生にとって災害看護の重要度が明確になった。韓国の看護学生に比べて日本の看護学生にとって重要度が高いことは、上記のパーセンテージで表した結果と同様である。しかし災害看護に対しての興味を聞くと、7割以上がとても、またはやや興味があると答え、両国の看護学生が災害看護の教育を受け、これからの災害時に備えていきたいという意思が見られる。

5. 自由記述の Text Mining Studio による分析

韓国の看護学生の自由記述を総合的にみると、まず災害看護の概念を自分の言葉で記入した人が多かった。災害が起こった地域に行き、被災者をいたわること、そのためには正しい知識を知っておく必要があること、被災者のために自分ができることをするなど、被災者の心身を看護するという意見が多かった。その結果、ことばネットワークのグループAでは、被災、発生、地域、いたわる、できる、知るなどの単語がそれぞれ災害という単語と関連し、大きなグループを形成していることがわかる。このことから、災害看護に対して、被災者の健康・安全を優先する考え方が見られた。しかし、「自然災害が起きたら、その現場に行って行うこと」という抽象的なイメージが多く、生活のなかで身近な人為的災害のことは挙げられていなかった。災害看護に関して「分からない」、「学んだことがない」という意見も多く、今回の東日本大震災の様な規模の大きい災害だけを災害看護の対象としているのではないかと推測した。しかし韓国でも毎年洪水や台風などの自然災害や、車の事故などの人災は毎日のように起き

ている。また、建物の崩壊も起こり、例えば 1995 年 6 月、韓国のソウルにある某デパートが崩壊し、約 500 人が死亡し 950 人が怪我をすることがあった(サイドローズ, 2011)。2003 年にはテグという地域の地下鉄で火災が起き、200 人が死亡し 150 人が怪我をした(國島正彦ら, 2003)。この様に災害はいつ、どこで、どの様な原因で起きるか予測できないため、日ごろに災害発生時の備えをしておく必要があると考えられる。次に数多く出てきた言葉は「被災者をいたわること」、「心身のケアであり、身体的の損傷だけではなく家族や財産、仕事を失った被災者の精神的サポートを中心に看護を行うべきであること」が意識されていると予測する。しかし中には「どのようなことをすればいいか、どのようなことを話せばいいかが分からない。」といった意見も少なくない為、災害看護という言葉も聞いたことのない韓国の看護学生に対して災害看護は漠然なことともいえる。そのためにも、災害看護の教育は非常に重要であると考えられる。

日本看護学生の自由記述の文章量は韓国看護学生に比べて少なかったが、韓国看護学生と同様なクラスターが形成されており、「自然災害」という言葉の頻度は高かった。しかし、「増える」という単語も述べられており、例えば「全国的に地震が増えている今、災害看護の重要性を知っていくことが大切だと思う」、「今の日本にとっても大切なもの。今後も自然災害は増える。発展していくべきだ」という意見から最近の日本の現状を認識したうえで自然災害の影響に備えるために災害看護が重要であることが書かれていた。また、地域の連携や看護の技術の向上により役に立つことができることも述べられていて、韓国の学生と比較して少し具体的な対処方法が書かれていることが分かった。しかし、韓国の学生と同じように「災害看護が何かが分からない」という意見も多く、さらに「あまり聞いたことがない」と、日本の学生も韓国の学生と同様に災害看護の知識が少ないことが明らかになった。よって、両国の看護学生に災害看護の教育を行い、基本的な看護技術を身につけてもらい、様々な災害に備えることで被害者を最低限にする必要があると考えられる。

今回の研究では災害看護学の科目のない韓国看護学生と、災害看護学が未履修ではあるが他科目に災害看護が少し含まれている日本看護学生を比較する調査になった。両国の看護学生とも災害看護の科目を履修していないことにより、災害看護教育の履修者と未履修者の知識度比較が困難である。さらに、両方の看護学校が保健看護学を教育しており、地域看護学という形で災害看護を学んでいる可能性もあるが、韓国の看護学生が災害看護教育を全くされていないとは限らないことと日本の学生の受けた教育の程度は調査に含まず、災害看護教育に関する知識の比較には限界があった。次回の課題としては、災害看護の履修者との比較で、どのような差があるのかを明らかにすることである。

謝辞：本研究にご協力いただきました韓国W大学看護学部 1~3 年生の皆様、日本H大学看護学部 1~3 年生の皆様、Text Mining 4.1.0 を寄与してくださいました株式会社数理システムの皆様に深謝申し上げます。

V 結論

災害はいつ起こるか予測が不可能である。地震や津波、洪水、台風などの災害は毎日のように世界各国で起きていていると言っても過言ではない。さらに火災や原発、車事故、建物の崩壊、テロなど、人為的災害も無視はできない。このような様々な災害に対して、災害看護の教育力を高めると、例え災害が起きて人的被害を受けたとしても、より多く人々の命を助けられるのではないかと考える。韓国でも地震

が起きる可能背もあり，洪水や台風の被害も大きいため，韓国で災害看護を行うときっと役に立つと考える。

今回の研究を通して，日韓の看護学生が災害や災害看護に対しての思いや，その違いを比較した。日韓の看護学生の災害発生時の対応方法や災害に対しての意識の差は明らかに違うことが分かった。地震時の対処方法は日本の看護学生の方が具体的な知識を持っていて能動的に対処でき，韓国の看護学生は自律的な行動がとれずに素早く退避できることは難しいと考える。そのためには，災害発生時の正しい対応方法などを教育することで，看護学生本人の身はもちろん，たくさんの被害者に看護を行うことができると思う。二つ目の，看護学生は日本学生に比べて災害に関する知識が少ないことによって，災害ボランティアの参加の意欲が低いのではないかをいう仮説に関しては，災害の知識と参加の意欲は関連性がなく，韓国の学生のほうが災害ボランティアへの意欲が高いということが明らかになった。その意欲に正確な災害看護の知識が加えると，災害発生時にさらに適切な災害看護が行えられると考える。最後に，韓国の看護学生は災害看護教育の重要性を意識しているという仮説に関しては，韓国の看護学生は日本の看護学生に比べると災害に関して抽象的で，それに対して日本の学生は具体的であるということが分かった。しかし，災害看護が知られていないのにも関わらず韓国の看護学生が災害看護の教育を必要しているということが明らかになった。2005年に台湾で行われた学会で「Disaster Planning with Roadmap of Nursing Action」というワークショップが開催された。看護が災害の状況により効率的に素早く対応し，資源が最大に活用できるようにするためにも韓国での災害看護の教育が大切であること(Ok-Cheol Lee, 2005)が発表されていたこともあり2005年から韓国でも災害看護の教育の普及に注目していることが分かった。よって，日本はもちろんのこと今後は韓国も災害看護の教育を行うことによって，災害に備えての人材を育成し，社会へ貢献できると考える。

VI 引用文献

- Dong-Jun Yang(2010). 韓国における歴史時代の自然災害と災害対応の事例，東アジアにおける現代の地表プロセスと歴史的環境変動，学術の動向。
- KERC 韓国地震研究センター(2011). 地震歴史と現在，2011年8月19日，引用 <http://quake.kigam.re.kr/>.
- 金城 夏樹，西川 まり子(2010). 看護学生の禁煙を阻害する要因—Text Mining Studio での分析，広島国際大学，1-9. 引用 http://www.msi.co.jp/tmstudio/stu10contents/stu10_18.pdf.
- 國島正彦，浅見絵里佳(2003). 大邱の地下鉄火災，2003年2月18日大邱市。
- Mun-Gon Lee, Bong-Su Kim(2011). 韓国での強震により学校・役所の被害が最も大きい，アジア経済，2011年3月15日，引用 <http://www.asiae.co.kr/news/view.htm?idxno=2011031418280009467>.
- Ok-Cheol Lee(2005). 第23回 ICN 総会災害看護ワークショップ，大韓看護，2005年7月8日。
- サイドローズ(2011). 韓国のサンブン百貨店崩壊，知識のデータベース，2011年9月28日，引用 <http://www.sydrose.com/case100/402/>.
- 数理システム(2011). Text Mining Studio，バージョン 3.2.1, 1-49.
- 統計局・政策統括局・統計研究所(2011). 東日本太平洋岸地域のデータ及び被災関係データ，被災地域に関する統計情報，2011年8月25日，引用 <http://www.stat.go.jp/info/shinsai/>.
- Yang-Suk Kang(2007). 韓国の災害リスクとリスク管理教育，リスク管理共通教育中核教員団の養成。